

しまいました。

まことにくやしう、残念至極ゆるせない気持ちで葬儀をすませ、三日後には、今度は私が急性腸炎で生死をさまようような大病にかかり、これを持ち越えて三か月後には全快しました。私達親子三人揃った家庭生活が始まったわけでありませう。

北満で女一人、三年生きた

群馬県 木村 ぬい

昭和二十年七月二十日、夫に召集令状がきてハルビンに入隊、私は出産のため入院し、産後の肥立ちが悪く、退院できません。赤子は十日目に死亡しました。

八月に入ると、まわりが急に騒がしくなり、部落の青年達は召集され、残された婦人達は、米や豆をいり、携行食を作り、本部に集合し、話あいをしたり、百姓をして働いたりして目まぐるしい生活をしていました。

ある日「ヤンジャンに集合」の連絡があり、そこへ行

くと、日本軍が白旗を振って大勢きたソ連兵に武装解除させられ、その際に発砲して二人の怪我人ができました。そのときが終戦だったのです。

八月末、嫩江部隊に集合して「こんなに集めてどうせ殺すんだらう」と皆が不安でしたが、口に出ませんでし

た。
ところが予測とは異なり、殺されずにその軍官舎に住み、四か月近く生活をしました。一日二回高粱の食事をあたえられ、お腹がすいて、満人からおからを買って食べたり、部隊の梅干しや芋を拾って食べたりしました。

ある夜ソ連兵が部屋に侵入してきたので、私はカマスをかぶり、息を殺して荷物になっていました。またフットがなくて、夜中は寒くて眠れず、わらの中に寝ました。朝起きると髪の中にわらが入り、とれないで苦心しました。忘れもしない二十一年一月十六日、夕方本部に集合し、枕木の釘二本持たせられ、線路の敷設作業を二晩中させられた。

北満は寒くて、零下三十度をこすので、一歳から五歳

ぐらいまでの子は大勢亡くなり、死人の山ができませんでした。その死体の着物を剥ぎとり、市場へ持っていき売っていったのを私は何回も見ました。

春になると、ソ連兵は引揚げ、私達は満人の家へ手伝いにいき、一日幾らで働き、生活をしました。八月末になると、部落を転々としながら、南下して十日間も歩き続けたこともありました。夜は部落の満人の家の納屋に寝かせてもらい、朝は早くから歩いていけると「暁に祈る」の歌声が遠くから聞こえる。胸が冷たくなり、涙がこぼれる、日本兵だろう。

そこから今度は貨車でチチハルに着く。ここでは十八歳から二十五歳までの男子は残され、共産主義教育を受けさせられた。私は肺炎にかかり入院して二か月療養後全快したが、左目が見えなくなり、また入院です。ようやく良くなり、そのままこの病院で付添婦人として二か月ぐらい働きました。

患者の木村さんの寝巻にシラミがつき、外で叩くとバラバラと音をたてておちる。恐ろしい。病人はつきかっつきへと死亡して、本当に可哀そうだった。

今度は八路軍の子どものお守りを頼まれ、言葉が通じず、苦労しました。チチハルに一年、ハルビンに一年、大連に一年といつ帰れるかあてもなく、言われることをしながらその日その日をたいせつに生きてきました。

二十四年八月、帰国させるとのこと、涙がとめどもなく出ました。八月末、山澄丸で大連港から舞鶴へ一週間で着き、水上の主人宅へ電報を打ったら、主人の名前で、返電があり、嬉しくて飛び上がり喜びました。

仲間のAさんは「家があつていいね」と一言。Bさんは私は橋の下の土管の中にも寝るかとおつぶやく。東京駅には主人と妹と伯母さんが迎えに出ていてくれました。

現在当地で百姓をしています。引揚げて何年かたち、テレビが入り、残留孤児のことを見て、あの頃の自分を思い、孤児の身の上を思うとただ泣けるだけです。戦いの傷あとはいつまでつづくのか。ずいぶん苦労しました。

新妻時代、子どもに死なれ、主人は戦地へ、一人北満の地で三年余を生きてきました。